

鳥たちは自分の好みのお立ち台を持っていて、そこでよく鳴く。歌の名手のオオルリやクロツグミは敷地の中でも一、二の高さのミズナラのでっぺんがお気に入りようだ。そこからよく通る声で歌うのはさぞかし気持ちが良いと思う。一方、歌はお世辞にもうまいといえないが、しきりに鳴くのが好きなヒヨドリは、何を思ったか我が家のテレビのアンテナをお立ち台として選んだ。声からしてパンク系を自認しているのか。そういえば、アカゲラは木を「コンコンコン」とテンポよくつつくドラミングを得意としてるが、なかにはお隣の金属電柱を甲高い音で叩くのが好きなのがいる。若い鳥たちの間ではニューウェーブが生まれているのかもしれない。アンテナをお立ち台としたヒヨドリは見上げて聞いていた妻にウンチを落とす。かなり破壊系のような。思いつきり声をあげると腹に力が入るのか歌の途中でウンチをする鳥はヒヨドリだけではなく結構いる。おかげでアンテナの下の玄関階段の隙間から桑の木が生えて来て慌てて広いところに移植した。

鳥たちはどんな歌を歌っているのだろうか。鳥には言語があるという最近の研究もあるみたいだが、それだけでなく鳥たちには何か歌の美学があるような気もする。わかりやすいのはウグイスだ。例の「ホーホケキョ」なのだが、春先の若鳥にはそううまく鳴けないのがある。妻は「フォトビジョン」と鳴いているというのだが、まさかと思つて聞いていると、そう聞こえなくも無い。「ホー」のところのタメがうまくできないのだ。でも、何度もなんども鳴いているうちにだんだん上手くなってくる。難しいのは後半だ。「ケキョケキョケキョケキョ」と、よく息が続くと思うぐらい長く鳴く。ただ、そのうち「ケキョ・…ケ、ケキョ」と不安定になってくる。歌の最後をどのように終われば良いのか迷っているうちにわからなくなってしまう。そんな感じに聞こえる。これが名手になると「ケキョケキョケキョケキョ」を長く弱まりもせず一気に歌い上げるのだ。歌の先生がいるのか、皆練習を重ねて上手くなっていく。

鳥たちがよく鳴くのは早朝で、その一斉に鳴き出す様は「朝のコーラス」として知られているか、夕方もよく鳴く。ただ、聞いていると朝と夕方ではニュアンスが違うような気がする。朝は力がみなぎって希望に満ちた鳴き方だ。朝からナンパに精を出しているのだとは思うが、暗闇が空けまた新たな一日が始まる喜びを高らかに歌い上げていると思つてみたくなる。一方、夕方はクロツグミのの歌を聞いていると、吟遊詩人のように今日一日の出来事を振り返り、音に乗せ語っているように思える。「あんな楽しい思いもした、こんな危ないこともあった、でも、良い一日だったね」と。そう、私たちも良い一日だったよ。

春に鳴き声を聞くとホッとする鳥がいる。オオジシギだ。遠くオーストラリアあたりからノーストップで飛んでくる渡り鳥で、途中、嵐に巻き込まれて命を落とすものも少なく無いようだ。「ギ、ギ、ギ、ギ」と鳴きながら大空高く舞い上がり、一転急降下する。その時の翼の風切り音が「バババババ」と凄まじい。孤独な長旅を経てパートナーを探す姿にどこか哀愁を感じる。

